

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601  
 研究種目：基盤研究(B) (一般)  
 研究期間：2013～2016  
 課題番号：25284069  
 研究課題名(和文) 雑誌研究の理論と方法に関する比較文学・比較芸術的研究 明治大正期日本を中心に  
  
 研究課題名(英文) Study of the Use of Comparative Literature and Arts Theories for Research on Literary and Art Magazines, with a Primary Focus on Meiji and Taisho Japan  
  
 研究代表者  
 今橋 映子 (IMAHASHI, Eiko)  
  
 東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
  
 研究者番号：20250996  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治大正期研究で一次資料として対象外であった「雑誌」が「研究」としていかに可能かを、比較文学・比較芸術的観点から明らかにした。特に、1900～20年代に展開した「文学芸術総合雑誌」を徹底分析することで、この時期の雑誌文化が、同時代の出版統制史と深く絡み合っていること、文学芸術系の総合雑誌は同時代の思想系雑誌と深い連関にあること、明治大正期の雑誌はその同人たちや関連人物たちの思想的紐帯であり、雑誌を基盤に多くの活動が派生的に行われたことなど、新たな側面を拓く視点、方法論を獲得することができた。本研究の成果は6本の学術論文等で公表され、すべての成果を含んだ刊行本を近く上梓する予定である。

研究成果の概要(英文)：This research clarified the potential of "magazine research" using methods taken from the field of comparative literature and arts. Thorough analysis of "general-interest literary and art magazines," a genre that flourished in the twentieth century, produced a perspective and methodology that has opened up new directions in research on Meiji-Taisho culture. Results include demonstrating concretely (1) the deep involvement of magazines in the history of publishing during this period; (2) close and unexpected links between general-interest literary and art magazines and ideological magazines published during the same period; and (3) how these magazines provided important intellectual and ideological connections between their contributors and other related persons. The output of this research includes the publication of six essays and other scholarly activities. A book presenting all results of this research is scheduled for publication in the near future.

研究分野：人文学

キーワード：雑誌研究 美術雑誌 明治大正文化 岩村透 初期社会主義 日本近代美術 思想雑誌 比較文学

## 1. 研究開始当初の背景

1900-1920年代日本は、まさに「雑誌の世紀」と言って良いほど、多くのジャンルで雑誌が発刊され、それが文学・芸術・思想活動の根幹をなしていたと言って良い。実際近年、近代日本文学雑誌、美術雑誌そして総合雑誌などの復刻、目次編纂、テキストのデジタル化などが出版界で重要視され、盛んに進められてきた。しかしそれに対応する実証的、理論的研究が進んできているかと言えば、意外にも進んでこなかったと言える。雑誌と言えば、文学全集などの定本のテキスト提供(書誌学的意味)か、文壇や画壇の動向、あるいは「流派」の根拠としての把握が中心で、雑誌そのものを対象とした研究の可能性が探られたことは少なかった。また現代から見て驚くほどの質と情報量を誇った当時の雑誌が、直接間接に参照し得た同時代海外雑誌との関連性に関する、クロスエリア的な比較研究も全く手つかずとなっている。

また何よりも1900-1920年代雑誌の特徴として、写真製版技術の進化により、視覚的要素をふんだんに含み、誌面デザインも凝り、しかも文学と美術(デザインや建築を含む)が緊密に関連した雑誌—「文学芸術総合雑誌」としか言いようのない、クロスジャンル(境界横断)的な雑誌が数多く出版されていたことは重要である。しかし、雑誌発行と流通を通じて形成された、文壇や画壇を問わない豊かな人脈とその意味が、徹底的に明らかにされてもこなかったのも事実である。

## 2. 研究の目的

本研究はこれまで明治大正期研究で一次資料そのものとして分析されてこなかった「雑誌」を前面に出すことを、何よりの特徴としている。しかも茫漠とした総合把握、あるいは特定雑誌の個別研究ではなく、明治大正期の文化研究に新たな側面を拓く視点、方法論を具体的に提供することが目的である。

今回は主に、明治大正期(1900-1920年代日本)における「文学芸術総合雑誌」を対象とし、主に以下の三点を明らかにすることを目的とした。

### (1) 明治大正期雑誌と思想統制の解明

明治から大正時代を考える時に、従来の文化研究でまだ徹底して追究されてこなかったのは、大逆事件(1910-1911年)の出版界への深い影響である。この事件の前後から急速に強まっていった思想統制の影響は、実に1945年の敗戦期にまで及んでいる。近年1930年以降~GHQ統制期の発禁問題についてはかなり研究が進んでおり、国内外の資料も多数発掘・出版され、理論的研究も進んでいるが、その前史となる「大逆事件前後の出版統制と文壇、画壇、思想界との関係」に関する考察は手つかずと言って良かった。本研究はそれに最初の風穴をあけ、出版統制の前史

を描き出すことを目的とした。

### (2) 文学芸術総合雑誌の比較文学比較芸術的解明

すでに述べたが、明治大正期にきわめて特色的なのは、「文学芸術総合雑誌」としか呼びようのない、クロスジャンルの優れた、視覚的にも美しい雑誌が次々と生み出されたことである。この時代の「文学芸術総合雑誌」とは何よりも、国内外の膨大な情報収集と発信の場所、執筆者たちの紐帯、そして「批評ジャンル」確立の場として捉え直すことができる。それについては、従来の文学、美術史研究では全く意識されてこなかった。本研究ではクロスエリア、クロスジャンルという比較研究の手法を用いることによって、個々別々の雑誌記事でなく、「雑誌研究」がいかに可能かという方法論的思考を重視する。

### (3) 文学芸術系雑誌と思想系雑誌との関連の解明

明治大正期の文学芸術総合雑誌を複数取り上げて研究していくと、文学、芸術という枠を超えて、思想系雑誌とも深い連関をもっていることが窺われる。本研究では特に、同時期のキリスト教系雑誌の代表格である『六合雑誌』および、大逆事件下に自由主義的展開を見た『太陽』を取り上げ、それらと、当時の文学芸術系雑誌が、いかに深い連関をもっていたかを、初めて明らかにしていく。

## 3. 研究の方法

(1) 上記研究目的(1)を解明するに際しては、雑誌研究に出版史研究を結節させるだけでなく、とりわけ初期社会主義運動やそれに関わる作家たちに関する近代日本社会史および文学史の、膨大な成果や方法を援用した。

(2) 上記研究目的(2)を解明するに際しては、今回、明治大正期の美術界で最も「総合誌」の名にふさわしい媒体として、『美術新報』『美術週報』『明星』『方寸』などを取り上げて徹底的に分析した。その上で「美術」という領分が、当時はいかにも自然に、一般的な総合誌の中でもかなり高度なレベルで取り上げられている現象に着目し、『早稲田文学』『三田文学』『太陽』などの媒体を精緻に分析した。

一方で、この時代の文学芸術総合誌で最も活躍し、現在に忘れられている重要な存在として、岩村透(美術批評家、東京美術学校教授)および坂井犀水(美術編集者、美術ジャーナリスト)を取り上げて、彼らの思想が実は初期社会主義思想と近いことをつきとめ、思想系雑誌との結節点を探った。

(3) 上記研究目的(3)を解明するに際しては、『六合雑誌』や『太陽』に関して、従来の雑誌研究の成果を援用しつつ、(従来全く例が無いが)初期社会主義思想といかに連関があるかを総体的に論じ直すという方法を取った。またそれぞれの雑誌の主幹、主筆

であった安部磯雄、片山潜、浮田和民などが「社会と美術」にいかなる考えをもち、それを雑誌の戦略としたかを分析した。

(4)そして上記すべての項目に当てはまる方法論としては、「雑誌」という存在を一次資料とする研究の可能性をさらに広げるために、「雑誌の編集者/読者/同人」などに着目するメディア研究、ある特徴的な巻号に特化しそれを一つのテキストとして記号論的分析を加える「一号分析」手法の開拓、雑誌がしばしば同人たちの思想的紐帯であることに着目し、彼らが雑誌の誌面を飛び出て社会活動する様子を分析する雑誌事業研究など、多面的な方法を試行し、成果を導き出した。

#### 4. 研究成果

(1)明治大正期の文学美術総合雑誌が、出版統制をかいくぐりながら独自の戦略を練り上げ、思想界とも連動しつつ、とはいえ芸術的に高次の誌面を作成していた、という様相を最もよく分析できる対象として、美術編集者・坂井犀水の存在に行き着いた。坂井犀水についてはそれまで全く研究がなく、筆者の今回の研究成果(2013)が、その後の犀水研究に援用されている。

(2)上記と同様の理由から、次に、美術批評家・岩村透と雑誌『美術新報』『美術週報』に関わる具体的研究を、計3本の論文(2014, 2015)にまとめて発表した。従来美術雑誌と思想系雑誌との連動は全くと言って良いほど認識されておらず、大きな一つの成果となったと考える。岩村透と坂井犀水の事例から明らかになるのは、明治大正期の雑誌には、主幹や主筆の思想的傾向や美学的方向性、社会的メッセージなどが、あたかも一冊の本のように込められている可能性があるということである。従って、雑誌の全号分析を経た後、特徴的と思われる一号に絞ってそれを記号論的に分析することによって、明確な企図を「読み取る」ことができる。このような「一号分析」の手法は、今後この時代の雑誌研究に必ずや実りをもたらすであろう。

(3)今回の研究によって、明治大正期における雑誌統制の問題が、内務省のみならず文部省政策にも発しているという、重大な事実を突き止めた。これは岩村透が晩年、全く理由のわからぬまま東京美術学校を事実上解職された事件を解き明かす鍵ともなっている。これについては近く詳論を公表する予定である。明治大正期の雑誌は、文学美術系雑誌でさえ、このような思想的闘争の場でもあることを今後考慮に含め、研究していく必要があることが明白となった。

(4)さらに『美術新報』『美術週報』などに集った同人たちは、国民美術協会という芸術家団体に深く関わり、彼らが画業だけでなく自主的な美術行政、美術事業、美術運動も行っている。この現象を雑誌研究としていかに考えるかを、最終年度に追究した。その結

果、三浦市三崎本瑞寺に遺存する岩村透(上記二誌の主筆であった美術批評家、美校教授)追悼作品群が重要であることが判明し、岩村透百回忌法要、作品展覧会、学術講演会を合わせた形で、2016年10月9日に行った(於本瑞寺)。

この行事は学術関係者および三浦市市民にも公開され、本研究の成果を最終年度に社会還元する機会ともなり、『神奈川新聞』(10月12日朝刊)、『日本経済新聞』(10月20日朝刊)などでも報道された。

(5)以上のように本研究は、当初の予定通りに進行した上に、予想以上の成果をもたらすものになったが、時間的制約から、明治大正期雑誌に多大な影響を与えている海外雑誌との関係を、比較文学・比較芸術的観点から詳細に分析する膨大な作業については、その一部を解明するにとどまった。ぜひとも今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

今橋映子「岩村透没後十年忌(1926年)本瑞寺所蔵追善作品群の意味」『2016年度科研費成果報告書』、2016年、1-62p、査読無

今橋映子「ラ・ボエーム オ・ジャポン ボヘミアニズムと日本」(新国立劇場『ラ・ボエーム』プログラム)、2016年、31-33p、査読無

今橋映子「大正改元期の美術問題 美術批評家・岩村透と輿論形成の戦略」東大比較文学會『比較文学研究』第100号、2015年、81-111p、査読無

今橋映子「美術批評家・岩村透と初期社会主義(下) 大逆事件下の「美術と社会」」岩村文庫『思想』1082号、2014年、111-157p、査読無

今橋映子「美術批評家・岩村透と初期社会主義(上) 大逆事件下の「美術と社会」」岩村文庫『思想』1081号、2014年、120-156p、査読無

今橋映子「雑誌『美術新報』改革と岩村透・坂井犀水 大逆事件とポスト印象派の時代に」東京大学大学院総合文化研究科『超域文化科学紀要』19号、2014年、137-176p、査読無

今橋映子「美術編集者・坂井犀水の軌跡 初期社会主義と明治期美術界」東京大学大学院総合文化研究科『超域文化科学紀要』18号、2013年、120-156p、査読無

〔学会発表〕(計4件)

今橋映子「三崎を愛した美術史家・岩村透  
岩村文庫という遺産」(招待講演)(岩村  
透百回忌法要記念講演会、2015年10月9日、  
於)神奈川県三浦市・海光山本瑞寺)

今橋映子「鷗外を継ぐ者一木下柰太郎のパ  
リ」(招待講演)(『文京区立森鷗外記念館コ  
レクション展「鷗外を継ぐ一木下柰太郎」展  
覧会関連講演会』、2015年8月22日、於)東  
京都文京区・文京区立森鷗外記念館)

今橋映子「1910年代日本における芸術言説  
と岩村透 大逆事件とポスト印象派の時代  
に」(シンポジウム企画及び発表)(日本比較  
文学会第53回東京大会シンポジウム「芸術  
とその批評言説 比較研究の視座から」、  
2015年10月17日、於)東京都目黒区・東京  
工業大学)

今橋映子「パリの果実は甘かったか 永井  
荷風の場合」(招待講演)(第8回明星研究会  
シンポジウム、2014年11月22日、於)東京  
都千代田区・日比谷コンベンションホール)

〔その他〕

今橋映子「岩村透百回忌法要」(記念行事：  
監修)岩村透百回忌法要、2015年10月9日、  
於)神奈川県三浦市・海光山本瑞寺)

今橋映子「本瑞寺岩村文庫展」(展覧会：  
監修)本瑞寺岩村文庫展、2015年10月9日、  
神奈川県三浦市・海光山本瑞寺)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者：

今橋 映子 (IMAHASHI Eiko)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号：20250996

### (2) 研究分担者

永井 久美子 (NAGAI Kumiko)  
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号：10647994  
(平成27年度より研究分担者)